

【カザフスタン】

交錯する視点

——カザフ社会の内外から伝統と現代を問う

藤本透子

映画『トルパン』は、家畜の鳴き声とどどーつと響く足音で幕を開ける。画面がほの明るくなっていくと、砂煙を上げて走るヒツジの群れがこちらに迫り、ウマに乗った牧夫がすばやく群れを統御する生き生きとした情景が目飛び込んでくる……。この映画の舞台となったカザフスタンは、国土の大半を見渡す限りの草原や沙漠が覆い、歴史的に遊牧民が行き交った地域である。基礎的な知識を前もって述べておくと、面積は日本の約七倍（約二七三万平方キロ）と広大なのに対し、人口は日本の約一〇分の一（約一

六〇一万人）である。民族構成は、カザフ人が六三・一パーセント、ロシア人が二三・七パーセントを占める（Agenstvo 2010: 10）。カザフ人はテュルク系のカザフ語を主に話す、ロシア語の方が流暢な人も多い。カザフ人の多くはスンナ派のイスラーム教徒である。政治的には、一九九一年のソ連崩壊に伴う独立を経て、大統領の権威主義体制が続いている。主要な産業としては、牧畜と穀物生産のほか、天然資源開発が重要な位置を占め、日本企業も関わって石油やレアアースの資源開発が進む。首都はアスタナ、最大の都市はアルマトウである。これらの基礎知識をふまえ、独立から二〇年を経て揺れ動くカザフスタンの人々の暮らしをより深く知るため、映画の世界へと入っていく^{*1}。

広大なステップに生きる家族と家畜たち

前述の『トルパン』は、ソビエト時代の社会主義体制からカザフスタンが市場経済に移行し、民営化の過程をたどったのちに牧畜経営に苦心しながら暮らす人々の生活を、ユーモアをこめて描き出す。カザフスタン出身の監督と俳優が実際に村落部に暮らし、ステップの厳しい自然と向き合うなかで撮影された。その筋書きを追いつつ、現代のカザフ社会に注がれる視線を見ていきたい。

兵役を終えた若者アスハットは、水兵の恰好のまま婦夫

婦の暮らすステップの村へとやって来る。村といっても、かつての遊牧生活に似て、見渡す限りの平原に天幕がぼつんとあるに過ぎない。毎日ヒツジを放牧する暮らしが始まる。よく働けばヒツジの群を分けてやる、と姉婿は言う。家畜の世話に慣れない若者は失敗ばかり。ステップの大自然は過酷で、強風が吹きすさび竜巻が立つ。

一人前の牧夫になりたいアスハットは、お嫁さんをもらおうと思いつく。牧畜は、男女が手分けして働くことではじめて成り立つからだ。彼は姉婿とともに、荒れた草原の先にある一軒の定住家屋へと出かけて行く。カザフスタンの草原には春になると野生のチューリップが花開くが、アスハットが憧れる少女の名はトルパン（チューリップ）という。しかし、この可憐な名の少女は、恥ずかしそうに隣の部屋のドアの陰にいるばかりで、姿を現してくれない。アスハットは、海軍での兵役の手柄話をする。巨大なタコに船が襲われていかに戦ったか。……草原で聞くタコの怪談はいかにも奇妙だ。努力にもかかわらず、大きな耳が嫌われてお見合いは断られる。あきらめきれずに再び家を訪ね、小屋の中に物音を察して少女だと思つて話しかけ続ける。「人つてもいいかい?」、体当たりしてドアをこじあげ倒れこむと、そこにいたのは一頭のヤギ! 呆然とするうち少女の母親に見つかり、ドアを壊したと怒鳴られて出入り禁止になってしまう……。

て人工呼吸すると、仔ヒツジはようやく弱い声を上げる。仔ヒツジを抱き上げるアスハットのほつとした笑顔。都会に憧れるのではなく、困難でもここにある暮らしを生きたいというメッセージが伝わる。カンヌ国際映画祭ある視点部門グランプリ、東京国際映画祭で最高賞と監督賞を受賞した本作品は、リアリズムに満ち、草原の家族の暮らしが自分のまわりで今まさに展開しているかのような感覚におそわれる。カザフスタンの圧倒的な自然と、そこに生きる人々にとっての伝統と現代のありようを静かに鋭く描いた作品である。

カザフスタンの村人が観る映画

私が二年を過ごしたカザフ村落は、『トルパン』の舞台より交通の便がよく、学校や商店もあるが、自然と向き合いい牧畜にたずさわる厳しい暮らしは変わらない。そのような村で、カザフ人たちはどのような映画を見るのだろうか? ソビエト時代には村まで映画フィルムが持ち込まれて上映されたというが、現在では都市の映画館に行かなければフィルムを見る機会は少ない^{*}。村で映画に触れるのは、主にテレビを通してである。二〇〇〇年代前半、村にまだ残っていた白黒テレビは急速にカラーへ移行し、裕福な世帯では衛星放送を受信できるアンテナも取り付けられていった。歌と踊りがにぎやかなインド映画や、「心優し

失敗を繰り返しつつ牧夫を夢見るアスハットの傍らで、甥っ子が唯一のメディアであるラジオにかじりつき、大統領の国民へのメッセージ「二〇三〇年のカザフスタン」の一句一句を父親に暗記して聞かせる。多方面にわたる政策を語り、二〇三〇年にはカザフスタンは豊かな国になっていることを謳う内容である。父親はその暗唱ぶりに頬を緩めるが、生活は厳しいことが映像から伝わってくる。現実を見つめる映画の透徹した眼ざしから何を読みとるかは観客にゆだねられるが、政治の現状への静かな批判をここに感じる。さらに、批判にとどまらず、映画はひたむきな人々の多様な姿を映し出す。貧しい暮らしの中で、姪っ子は暇さえあれば声を張り上げてカザフ語の歌を歌い続ける。一番末の幼い男の子は、木の棒をウマに見立ててまたがり、ドウクドウクツ、ドウクドウクツ、とウマの蹄の音を口真似しながら遊び、天幕の破れ目から出入りする。この伝統的遊びに夢中になりながら、男の子は叔父にあたるアスハットに、「アルマトウに行くの?!」とことあるごとに熱心に尋ねる。都会への漠然とした憧れ。村落部で職が得られないため都市へと移住する若者は多い。

やがて季節は冬から春へと向かう。ヒツジの出産シーズンが到来したのに、死産が続く。そのなかで、アスハットは生まれて初めてヒツジの出産に立ち会う。生まれおちた仔ヒツジは、なかなか息をしてくれない。思わず口をつけいサムライ」という日米合作映画のロシア語・カザフ語吹替え版など、多くの外国映画が放送された。それらに混じって、ソビエト時代に制作されたカザフスタン映画もしばしばテレビ放送され、中年から年配の人々が懐かしく見入っていた。例えば、『クズ・ジベク』は、一七世紀頃の叙事詩をモチーフに、ジベク（絹）という名の美しい娘をめぐる二人の若者の争いを描く。天幕の暮らし、ウマやラクダに乗っての季節移動など、やや美しく修飾され過ぎているとはいえ、近代化以前の裕福なカザフ遊牧民の暮らしを生き生きと伝えている。

また、調査地であったパヴロダル州バヤナウル地区は、著名なカザフ人映画監督で俳優のシャケン・アイマノフ（一九一四—一九七〇）を輩出した地域であったため、二〇〇四年七月に行われたシャケン・アイマノフ生誕九〇年祭では、代表的な映画として『タキヤの天使』などが上映された。タキヤは円柱形をしたカザフの民族帽で、主人公はいつもスーツにタキヤをかぶって街を歩く。映画では、もう若くはないこの男性の嫁探しをめぐって、その母親、そして若い女性の三人によるコメディが繰り広げられる。『クズ・ジベク』も『タキヤの天使』もソビエト時代に制作されたものの、カザフの伝統を感じさせる映画であり、そのことがカザフスタン独立後にも上映される結果に結びついていると言えよう。

しかし、人気が高いこれらのソビエト時代の映画に比べ、現代のカザフ社会を鋭くも温かく見つめた『トルパン』はじめ、新しいカザフスタン映画は村人たちによく知られていない。街の映画館でも、アメリカ映画などの外国映画が氾濫し、残念ながらカザフスタン映画が上映される機会はあまりないのである。

表象されるカザフスタン

そうした状況下にあつて、映画を通してカザフスタンはまったく異なる角度から国際的に有名になってしまった。アメリカ映画『ボラット——栄光ナル国家カザフスタンのためのアメリカ文化学習』（二〇〇六）である。イギリス人コメディアンのカシヤ・バロン・コーエンは、ボラットという名前のカザフスタン国営放送リポーターに扮してニューヨークを訪れ、行く先々で突撃インタビューや問題行動を確信的に繰り返しながら、憧れの女優に会おうとアメリカを横断する。その珍道中を描きつつ、反ユダヤ主義、女性解放運動、対テロ戦争など、アメリカ社会を鋭く風刺するこの映画は、ゴールデングローブ賞主演男優賞を受賞した一方で、アメリカで数々の訴訟問題を引き起こした。

カザフスタンに関して言えば、本作品に描かれるカザフスタンはほとんど架空である。カザフスタンで撮影された

部分はなく、「ユダヤ人を追う祭り」が行われることや、「売春婦」に関するナンセンス・ストーリーも、もちろん事実ではない。カザフスタンの言語として話されるのは、カザフ語には似ても似つかない造語である。しかし、もともとらしく中央アジア諸国の地図が示され、カザフスタンの国旗が幾度も画面に現れる。また、「カザフスタン国歌」と称する歌が、アメリカ国歌のメロディーに合わせ、風刺をこめて歌われる。この映画は、日本も含め世界各国で上映されDVDも発売されたが、カザフスタンでは上映が見合わされた。コメディーであればいかなる他者表象も笑いととも許されるべきなのか、表現の自由とはどこまでか、カザフスタンを表象する権利は誰にあるのかなど、問われるべき課題は多い。

日本では、カザフスタンでの取材に基づきさまざまなテレビ番組が作成されるようになったが、カザフスタン映画が上映される機会はまだまだごく限られる。上映が徐々に増えることに期待したい。その土地出身の監督や俳優によって長い歳月をかけて制作される映画は、内側からの視点で地域社会を切りとる。『トルパン』のように、厳しい自然と人々の暮らしの調和やカザフの伝統と現代を問う作品が発表されているのは、それらがまさにカザフスタンの人々が直面し、未来へ向けて問い続けていることだからである。

●注

*1 本論は、平成二二〜二三年度科学研究費補助金研究活動スタート支援「中央アジアの越境空間における宗教復興の新たな展開」（代表：藤本透子）による調査と民博共同研究「映像資料を活用したイスラームの多様性に関する地域間比較研究」（代表：吉本康子）の成果の一部である。

*2 中央アジアの映画史は井上（二〇〇三）参照。特にカザフスタンでは、ソビエト時代末から「カザフ・ニューウェイブ」と呼ばれる新たな作品群が登場した（井上二〇〇三：一三六）。*3 アメリカでは、カザフスタン映画の上映も地道に行われている。二〇一二年一月には「ステップの花々・カザフスタン映画フェスティバル」がボストンとワシントンで開催され、民間治療者の助言で男の子として育てられた少女の物語『セケル』、遊牧社会の歴史を背景とした『花嫁』、ステップに暮らす少女を描く『アククズ』、都市に暮らす女性を描いた『天使への手紙』、バスケットボール選手が主人公の『ダッシュ』などが上映された（聞く（<http://www.mla.org/programs/series/flowers-steppe-festival-kazakh-cinema>））。

●参考文献

井上徹（二〇〇三）「中央アジア映画の活力——新しい名作群と制作現場」宇山智彦編著『中央アジアを知るための六〇章』平凡社、一三五—一三九頁。
Agentstvo Respubliki Kazakhstan po statistike (Агентство Републики Казахстан по статистике). 2010. Перепись населения Республики Казахстан 2009 года : Краткие итоги / Под

ред. А. А. Смаилова. Астана : Агентство Республики Казахстан по статистике.

映画リスト

『アククズ』……① Aqiz, ② ジヤナベク・ジュエティル, ③ 二〇一一年, ④ カザフスタン, ⑤ カザフ語, ⑥ 未公開。
『クズ・ジベク』……① Qiz Jibek, ② スルタン・アフメト・ホジコフ, ③ 一九七〇年, ④ カザフスタン, ⑤ カザフ語, ロシア語, ⑥ 未公開。
『セケル』……① Seker, ② サビット・クルマンベコフ, ③ 二〇〇九年, ④ カザフスタン, ⑤ カザフ語, ⑥ 未公開。
『タキヤの天使』……① Takiya pershie, ② シヤケン・アイマノフ, ③ 一九六八年, ④ カザフスタン, ⑤ カザフ語, ロシア語, ⑥ 未公開。
『ダッシュ』……① Ryvok, ② カナガット・ムスタフィン, ③ 二〇一〇年, ④ カザフスタン, ⑤ ロシア語, ⑥ 未公開。
『天使への手紙』……① Pisma k Angelu, ② エルメク・シナルバエフ, ③ 二〇〇九年, ④ カザフスタン, ⑤ ロシア語, ⑥ 未公開。
『トルパン』……① Tupan, ② セルゲイ・ドヴォルツェヴォイ,

③ 二〇〇八年, ④ カザフスタン, ドイツ, スイス, ロシア, ポーランド, ⑤ カザフ語, ロシア語, ⑥ 東京国際映画祭（二〇〇八）, みんぱくワールドドシネマ（二〇一〇）。

『花嫁』……① Kelin, ② エルメク・トゥルスノフ, ③ 二〇〇九年, ④ カザフスタン, ⑤ なし, ⑥ 未公開。

- 学習」……① Borat、② ラリー・チャールズ、③ 二〇〇六年、
④ アメリカ、⑤ 英語、⑥ DVD 販売。

著者紹介

- ① 氏名……藤本透子（ふじもと・とうこ）。
② 所属・職名……国立民族学博物館民族文化研究部・助教。
③ 生年・出身地……一九七五年、宮城県生まれ、秋田県育ち。
④ 専門分野・地域……文化人類学、中央アジア地域研究。
⑤ 学歴……京都大学文学部史学科東洋史学専攻、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程（文化・地域環境学専攻）、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程（環境相関研究専攻）、人間・環境学博士（二〇一〇年）。
⑥ 職歴……日本学術振興会特別研究員、京都大学大学院人間・環境学研究科研究員、国立民族学博物館先端人類科学研究部・機関研究員を経て現職。
⑦ 現地滞在経験……カザフスタン（一九九八年に初めて訪れ、一九九九年～二〇〇〇年、二〇〇三年～二〇〇五年にカザフスタン教育科学省管轄 R. B. スレイメノフ東洋学研究所に外国人研究生・研究員として留学。滞在年数は延べ約四年）。
⑧ 研究方法……多民族都市アルマトゥではロシア語話者カザフ人の世帯に、カザフスタン北部の村落ではカザフ語話者の世帯にお世話になり、日々の暮らしを学びながら社会・文化について考えてきた。
- ⑨ 所属学会……日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、アメリカ人類学会、中央ユーラシア学会。
- ⑩ 研究上の画期……一九九一年のソ連崩壊・中央アジア諸国独

立と、二〇〇一年のアメリカ同時多発テロ。前者によって、外人によるカザフスタンでの人類学調査が可能となった。また、後者をきっかけとして、カザフスタンを含め中央アジアのイスラームについて、日常生活に根差した視点からより深く知り説明できるようにならなければと考えるようになった。

⑪ 推薦図書……岩崎一郎・宇山智彦・小松久男編著『現代中央アジア論』（日本評論社、二〇〇四年）。

⑫ 推薦する映画作品……『トルバン』（原題『Tupan』、セルゲイ・ドヴォルツェヴォイ監督、二〇〇八年、カザフスタン）。